

# *The Scale of Perfection* に見られる XVS 語順 —中英語期に起きた非 V2 言語への変化の中で—

小林 美樹<sup>1</sup>

## 要 旨

中英語期は V2 言語から非 V2 言語への変化が次第に進んだ時期である。本稿では 14 世紀後半の *The Scale of Perfection* を資料とし、この作品が XVS 語順に関してどのような様相を見せるのか、特に次第に消失していく他動詞や非能格動詞の V2 はこの作品においてどのような形で現れるのかを調査する。*The Scale of Perfection* では、広範な他動詞と非能格動詞が XVS 語順に起こり、また目的語前置による VS 語順にも多様な他動詞が生じている。同じ 14 世紀の他の作品との比較も行い、この作品は英語の全体的な歩みに比べて、より遅い時期まで古英語的な V2 を保っていた点で特徴的であるということを示す。

## 1. はじめに

古英語の散文においては主語以外の要素が文頭に置かれると、主語が完全名詞句の場合にはおよそ 75%が XVS 語順を示す (Haerberli(2007:17))。従って、古英語は厳密な意味での V2 言語とは異質であるものの、基本的には V2 言語の特質を示していたと考えられる。中英語 (1100-1500) はこのような古英語的な V2 語順が次第に消失していく時期である。文頭・節頭に主語以外の要素が起こる平叙文の主語と動詞の語順は、初期中英語では古英語に近い傾向を示すが、中英語末期になると XVS と XSV の発現は現代英語のそれに近くなる (Eitler and Westergaard

---

<sup>1</sup> 神田外語大学外国語学部英米語学科教授。

(2014), Haerberli (2002))。

このように英語が V2 言語から非 V2 言語に変化した結果、現代英語では基本的に起こらなくなった語順について、その消失の過程を研究する一環として、本稿では後期中英語の作品である *The Scale of Perfection* の XVS 語順を考察する。*The Scale of Perfection* は 14 世紀末に Walter Hilton によって書かれた散文による神秘主義文学であり、信仰生活の教導書である。

小林 (2019) では中英語期の 3 つの作品—13 世紀前半の *Ancrene Wisse*、14 世紀前半の *Richard Rolle*、14 世紀後半の *The Cloud of Unknowing*—を資料として、主節に起こる XVS 語順を調査した。中英語期の前期から後期にかけて、他動性をもつ他動詞がこの語順に現れにくくなり、また VS 語順に現れる他動詞の種類が限定され、特に 14 世紀後半の *The Cloud of Unknowing* では他動詞 VS 語順の使用が定型的表現や、認識動詞、状態動詞にほぼ限られている様が観察された。今回は 14 世紀後半の作品 *The Scale of Perfection* を資料とすることで、古英語的な VS 語順が生産性を失っていくその最後の方の段階でどのような現象が見られるのかという研究をより精密なものにすることを目的とする。

中英語期の XVS と XSV 語順の起こり方は時期によって異なるだけでなく、ほぼ同時期の作品でも著者によって、また同じ著者でも作品によって違いが見られる。Haerberli (2007:19) によると、15 世紀中頃の作品である *Book of Margery Kempe* と *Capgrave's Chronicle* では、他動詞と完全名詞句の場合の VS 語順はそれぞれ 5.9%と 20.0%であり、他動詞以外の動詞と完全名詞句が VS 語順で現れる割合は、36.5%と 74.0%と大きな開きがある<sup>2</sup>。同一著者の異なる作品の研究としては、Eitler and Westergaard (2014) が 15 世紀に John Capgrave が著した 4 つの異なる作品を観察し、文頭に現れる語句のカテゴリー、情報構造、主語が完全名詞句であるか代名詞であるかといった観点から各作品の XVS/XSV 語順の調査を行っ

<sup>2</sup> 疑問詞、否定辞、また、*þa*、*þonne*、*nu* が文頭位置に現れる場合は、原則的にまたは高確率で VS 語順が引き起こされるため、この調査はこれらの要素が文頭位置を占める場合を除いて行われている。

ている。方言によってどのような要因がどのような強さで倒置語順を引き起こすかが異なっており、同一著者による作品でも、想定される読者の住む地域がどこであるのか、また特定の地域に限定されない広い地域に渡る読者を想定しているのかによって、各作品に見られる倒置現象が異なるということを明らかにしている。

非 V2 言語への変化が一律には進まなかったことは近代英語においても観察される。Bækken (2005:512) は 1600 年から 1705 年を 35 年ずつの 3 期に分けて平叙文の XVS 語順について調査し、否定語句でない要素が文頭に起こる文の XVS 語順は第 1 期が 13%、第 2 期が 7.2%、第 3 期では 9.6%であり、17 世紀全体として減少していくものの、第 2 期から第 3 期にかけては増加していることを示している。英語において X 位置が否定語句でない文における XSV 語順が標準的なものになるプロセスは、起伏のない一方向性のもものではなかったとしている (Bækken(2005: 533))。

このように近代英語においてもまだ複雑な面を見せる XVS/XSV 語順は中英語期においてはより混沌とした様相を見せる。他動詞や非能格動詞が徐々に XVS 語順に現れなくなるということが中英語期の大きな流れである。しかし V2 言語から非 V2 言語への変化の過程で、作品ごとに、また、文脈により様々な要因で XVS/XSV 語順が発現していると考えられる。本稿で焦点を当てる他動詞の倒置語順等、現代英語に至るまでにほぼ消失した古いタイプの古英語的な XVS 語順も、時代が進むにつれてまっすぐに消失に向かったわけではない。The Scale of Perfection の V2 現象についても、英語史の全体的な大きな流れに合致する面と、またこの年代の作品に典型的に期待されるものとは異なる、The Scale of Perfection に特徴的な面が観察されると考えられる。

## 2. 古英語的な古いタイプの XVS 語順

The Scale of Perfection が書かれた 14 世紀後半は英語において V2 から非 V2 と

いう変化がかなり進んでいる時期である。その中でこの作品が XVS 語順に関してどの程度古英語的な性質を残しているのか、また次第に消失していく他動詞や非能格動詞の V2 はこの作品においてどのような形で現れるのかを明らかにすることが本稿の目的である。

まず古英語的な古いタイプの XVS 語順がどのようなものであるかを定める必要がある。現代英語の平叙文においても一般的に XVS 語順が起こるのは、否定倒置構文と **there** に導かれる存在構文の他に、X 位置に前置詞句、形容詞句、副詞句、また、動詞の現在分詞・過去分詞を主部とする句が現れる場合である。

- (1) From the darkness between the semi-detached houses across the street came the familiar figure of Jack Stone.
- (2) Vital to such decisions is a clear understanding of system functions, failure modes and the consequences of failure.
- (3) Ahead was a short marble staircase, leading to what appeared to be a lecture-room on the next floor.
- (4) Mixed with his revulsion was also a tiny feeling of excitement.

(Kreyer (2006: 6-8))

また動詞としては、be 動詞、非対格動詞がこの語順に現れ、(5)が示す様に、現代英語では他動詞は一般的に XVS 構文には起こらない。

- (5) \*Down the hill will John roll the cart. (Bowers (2002: 202))

また、非能格動詞は非対格動詞よりも倒置語順に起こりにくい。

- (6) a. Among the guests was sitting my friend Rose.  
b. \*Among the guests was knitting my friend Rose.

(Bresnan (1994: 78))

従って、本稿では(7)に示す XVS 語順を古英語的な古いタイプの語順とみなす。

(7) 古英語的な古い XVS 語順 (中英語期に次第に消失に向かった語順)

(i) 他動詞や非能格動詞の XVS 語順

(ii) 目的語が X 位置に現れる XVS 語順

(前置詞句、形容詞句、副詞句、動詞の現在分詞・過去分詞を主部とする句以外の要素が X 位置に現れる XVS)

(7(ii))は、(1-4)に見られるような「現代英語の平叙文でも文頭に置かれた場合に倒置を引き起こす要素」とは異なるものが X 位置に来る構文、即ち目的語が X 位置に来る構文を古英語的な古い XVS とみなすということである。

以下では(7(i))、(7(ii))の XVS 語順を中心に、*The Scale of Perfection* の平叙文に起こる XVS 語順を示し、英語史における V2 から非 V2 への変化のプロセスにおいてこの作品がどのような位置にあるのかを考察する。

### 3. *The Scale of Perfection* の XVS 語順

#### 3. 1 現代英語に残る XVS 語順

まず、中英語の平叙文において一般的に見られるタイプの XVS 語順を扱う。現代英語でも倒置語順が起こる否定倒置構文と *there* に導かれる存在構文については、当然、*The Scale of Perfection* においても XVS 語順が起こるが、以下には否定語句や *there* 以外の要素が X 位置に起こる XVS 語順の例を示す。(8-11)は助動詞が主語に先立つ XVS 語順である。V が助動詞である VS 語順は他の多くの中英語の作品と同様に *The Scale of Perfection* でも一般的に見られる。以下の例文では倒置語順の動詞と主語を太字にし、主語には下線、X 位置の語句には波線を施す。引用箇所を表示において SP は *The Scale of Perfection*、数字は行を示す。現代英語訳は Clark and Dorward (1991) による。なお引用は必ずしも文全体ではない。中英語からの引用も該当箇所の現代英語訳も、引用部分の最後の句読点、また句

読点の有無について原文通りとする。

- (8) By meditation **schalt thou** see hou mykil thee wanteth of vertues;  
'By meditation you shall see how far you lack virtues,'  
(SP: Book 1; 335-6)
- (9) Yif thou praye thus, than can thou preyen wel; (SP: Book 1; 663)  
'If you pray like this, then you know how to pray well.'
- (10) Now hast thou herd a litil what thi soule is, (SP: Book 1; 1477)  
'Now you have heard a little of what your soul is'
- (11) and thane art thou truli turned to Hym. (SP: Book 1; 16)  
'and then you will truly have turned to him.'

本動詞は(8)では他動詞の“see”、(9)では自動詞の“prey (pray)”である。助動詞と主語の倒置語順は、本動詞が自動詞か他動詞かに関わらず多く起こる。また(8-9)に見られる“shall”や“can”のような法助動詞でも、(10)の“hast (have)”のような完了相を形成する相助動詞や(11)の“art (are)”のような受動相、またときに完了相を形成する相助動詞でも、XVS 語順に起こる頻度は高い。

Kemenade and Westergaard (2012) は中英語期を 4 期に分けて平叙文における V2 現象を考察している。表 1 は主語が代名詞の場合に XVS 語順が起こる割合を動詞の種類別に示したものである。中英語期に他動詞や非能格動詞、また非対格動詞の VS 語順は明らかに減少しているが、助動詞と主語の VS 語順はほぼ変わっていないことが分かる。

表 1 中英語期の代名詞主語と動詞の倒置

動詞の種類	M1	M2	M3	M4
助動詞	27.9	26.5	33.4	30.6
他動詞または 非能格動詞	23.7	10.3	12.8	12.2
非対格動詞	26.9	11.8	15.3	17.2

(Kemenade and Westergaard (2012:100) をもとに編集)

古英語以来、XVS 語順は主語が完全名詞句の場合よりも代名詞の場合の方が起こりにくいですが、表 1 によると、代名詞主語の場合でも助動詞がある平叙文においては中英語期を通しておよそ 30%の割合で XVS 語順が起こっている。従って(8-11)に見られるような助動詞が関わる XVS 語順は *The Scale of Perfection* に特徴的な語順ではない。

次に非対格動詞が関わる XVS 語順を見る。非対格動詞は現代英語でも、(12)に見るように、副詞句や前置詞句などが文頭に置かれる文において XVS 語順に起こることが可能である。

(12) Outside stood a little angel. (Green (1980): 596)

非対格動詞の XVS 語順は現代英語まで残存しており、もちろん中英語の作品においても散見され、*The Scale of Perfection* では(13-14)のような例がある。

(13) And of this sight in hemsilf riseth a grete delite in here hertes  
(SP: Book 1; 494)

‘From this view within them arises a great delight in their hearts’

(14) And therefore fallen summe of hem in doute and in dwere  
(SP: Book 2; 526)

‘And therefore some fall into doubt and bewilderment’

先に見た助動詞の XVS 語順と同様に、非対格動詞の XVS 語順に関しても、*The Scale of Perfection* は中英語の一般的な倒置現象を示していると考えられる。

### 3. 2 古英語的性質を持つ、古いタイプの XVS 語順

助動詞や非対格動詞とは異なり、他動詞や非能格動詞の XVS 語順は中英語期において生産的な語順ではなくなっている。中英語の作品の XVS 語順を観察し、英語が非 V2 言語に変化する過程においてその作品の文法が XVS 語順に関しどのような特徴を示しているのかを考察するには、他動詞や非能格動詞の XVS 語順を詳察することが必要である。以下では、まず *The Scale of Perfection* に見られる他動詞の XVS 語順の例を挙げる。他動詞について XVS 語順がどの程度生産的なものであったかを考察するためには、この語順に現れる他動詞の種類が限定的か広範囲にわたるのか、また他動性のある他動詞が現れているのかという点が重要である。従ってやや数が多くなるが、それを検証するのに必要と考えられる例文を示す。

(15) thane **hath** he vertues in affeccion, (SP: Book 1; 323)  
‘then he has virtues in affection,’

(16) Thanne **seest** thou heere sumwhat that thu schalt neither deme othere men, ne  
conceive agens hem wilfulli noon evel suspicion.  
(SP: Book 1; 431-2)

‘Therefore you see something here; you must never judge other people or  
willingly conceive any evil suspicion against them;’

(17) Thus **techeth** us Seynt Poul, (SP: Book 1; 630)  
‘St. Paul taught us so’

(18) But now **desirest** thou peraventure for to knowe hou thu schuldest praie



(SP: Book 1; 645-6)

‘But now perhaps you want to know how you should pray,’

(19) Al this knowist thou wel, (SP: Book 1; 1203)

‘All this you know well,’

(20) Thus callethoure Lord in Holi Writ chosen soules,  
(SP: Book 1; 1266)

‘That is what our Lord calls chosen souls in holy scripture,’

(21) Thanne lovest thou thisilf in God, (SP: Book 1; 2026)

‘then you love yourself in God,’

(22) This ymage berist thou aboute, (SP: Book 1; 2457)

‘This image is borne by you’

(23) This doon thyn enemyes that thou schuldest thenke here seiyngte sooth,  
(SP: Book 2; 1295)

‘Your enemies do this to make you think that their talk is true,’

(24) than hath the soule newe gracious feelynges. (SP: Book 2; 2126-7)

‘then the soul has new and gracious feeling’

(25) For therin schewith Jhesu most love unto a mannys soule,  
(SP: Book 2; 2371)

‘for Jesus in that shows most love to man’s soul’

(26) This biddeth He bi His prophete that we schulde doo,  
(SP: Book 2; 2516)

‘This is what he tells us to do, speaking thus by his prophet’

(27) But this love and this mekenesse wirketh oonli the Holi Goost,  
(SP: Book 2; 2743)

‘But this love and this humility is the work of Holy Spirit alone,’

(28) And so sleeth the love of Jhesu coveitise of the world and bringeth into the

soule poverté in spirit.

(SP: Book 2; 2773-4)

‘And so God’s love slays covetousness of the world, and brings into the soul poverty of spirit.’

(15-28)に見るように、The Scale of Perfection では have, see, teach, desire, know, call, love, bear, do, show, bid, work, slay 等、多岐にわたる他動詞が XVS 語順に起こる。後期中英語においては、他動詞が XVS 語順に現われる場合、その殆どが認識動詞等の他動性の低い動詞であるという作品もある。(15-28)の中では、(19)の know は他動性の低い認識動詞であるが、その他の多くは他動性が高い他動詞である。(15)や(24)の have は状態動詞であるとも考えられるが、文脈を考慮すると、これらの have はある程度の他動性を持っていると考えられる。(24)を含む全文を(29)に示す。

(29) Whanne thourgh grace thise myghtes aren fulfilled in al undirstonding of the wille of God and in goostli wisdom, than hath the soule newe gracious feelynges.

(SP: Book 2; 2125-7)

‘When through grace these powers are filled with all understanding of the will of God and spiritual wisdom, then the soul has new and gracious feelings.’

(29)の“thise myghtes (these powers)”は、魂、精神、理性、意志などの能力を指しており、(29)は、そのような能力が恵みによって神の意志や霊的な知恵をすっかり理解できたとき、その魂は新しい恵み深い感覚をもったことになるということ述べている(野中(1992:204))。従って(24)、(29)の“hath (has)”は「もっている」という状態を表すというよりも、「手に入れる」という get のような意味をもち、従って他動性をもつと考えられる。(15)の hath も同様であり、節の初めの“thanne

(then)”が示すように、それまで自分の中に無かったものをその時に手にするという意味を担っており、従って他動性を有すると考えられる。

多様な他動詞が倒置語順に起こり、またその多くが他動性の高い他動詞であるということは、*The Scale of Perfection* の XVS 語順に関する特徴的な点と言えよう。4 節では中英語期の他の作品とも比較を行い、他動詞の XVS 語順についてより詳しく考察する。

次に非能格動詞の例を見る。現代英語において非能格動詞は非対格動詞よりも XVS 語順に現れにくい。*The Scale of Perfection* では、以下のような非対格動詞の XVS が見られる。

(30) thane **erreth** he **greteli** (SP: Book 2; 309)

‘then anyone is greatly mistaken’

(31) Thus **behigt** oure Lord **bi** His profete, seiande thus:

‘promised’

‘prophet’ ‘saying’

(SP: Book 2; 420)

‘Our Lord made such a promise through his prophet, saying thus’

(32) Thus **counceileth** Seynt Poul whanne he seid thus:

(SP: Book 1; 2482)

‘So counselled St. Paul when he said:’

(33) Thus **praiede** the prophete to the Fadir of hevene, (SP: Book 2; 1345)

‘So prayed the prophet to the Father of heaven’

(34) Than **thinketh** the soule nought, (SP: Book 2; 1428)

‘Then the soul indeed thinks of nothing’

(35) For to this ende **travelen** alle chosen soulis in this liyf,

(SP: Book 2; 1971)

‘For this is the end for which all chosen souls labor in this life’

- (36) Thus feelith the soule thanne with ful meke sikirnesse and greet goostli  
gladdenesse, (SP: Book 2; 2911)

‘This is how the soul feels then, with humble assurance and great gladness of spirit.’

(30-36)は、この作品において XVS 語順に現れる非能格動詞は少数に限定されていず、非能格動詞の XVS 語順が生産性を保っていることを示している。

また、say や speak のような伝達動詞が XVS 語順に現れることも多い。

- (37) Thus seith Seynt Paul: (SP: Book 1; 290)

‘This is what St. Paul said.’

- (38) Of this reformynge in feith speketh Seynt Paul thus:

(SP: Book 2; 363)

‘St Paul speaks thus about this reforming in faith.’

- (39) And than crieth the soule to Jhesu in goostli vois with a glad herte thus:

(SP: Book 2; 3053-4)

‘Then with a glad heart the soul cries thus to Jesus in the voice of the spirit’

XVS 語順に現れているこれらの伝達動詞は、(37-39)においては非能格動詞である。しかし現代英語でも say などの伝達動詞は、いくつかの制約を満たせば倒置語順に起こるため、これらの動詞が示す XVS 語順は本稿では古英語的な古い語順として扱わない。

本節では動詞に焦点を当てて The Scale of Perfection の XVS 語順を観察した。現代英語の平叙文では、X 位置の要素がどのようなものであるかに関わらず他動詞や非能格動詞は VS 語順に起こりにくい。従って特にこれらの動詞に焦点を当てて The Scale of Perfection の平叙文における XVS 語順の調査を行い、この作品においては他動詞や非能格動詞の XVS 語順はまだ生産性を保っていたと考えら

れることを示した。

### 3. 3 X位置の要素

本節では文頭・節頭要素に注目する。2節で述べた通り、否定倒置構文と **there** に導かれる存在構文の他、X位置に前置詞句、形容詞句、副詞句、また動詞の現在分詞・過去分詞を主部とする句が現れる場合には、現代英語の平叙文においても **be** 動詞や非対格動詞などに関して **XVS** 語順が見られる。従って本節では古英語的な古いタイプの語順として、(7(ii))に示した「目的語が X 位置に現れる **XVS**」を扱う。

- (40) This staat **haddest** **thou** in Adam bifore the first synne of man;  
(SP: Book 1; 1162)  
'This is the state you had in Adam before the first sin of man;'
- (41) Al this **knowist** **thou** wel, (SP: Book 1; 1203)  
'All this you know well,'
- (42) This charité **had** **Seynt Stevene** perfightli (SP: Book 1; 1990-91)  
'St Stephen had this charity perfectly'
- (43) This charité **counceilide** **Crist** to alle thoo that wolden be his perfite folwers  
(SP: Book 1; 1991-2)  
'Christ counselled it [=this charity] for all who wanted to be his perfect followers (□ 内引用者)'
- (44) This **asketh** **He**, for thus gyveth he. (SP: Book 2; 264)  
'this he asks, because this he gives.'
- (45) This **seeth** **the soule** bi grace, (SP: Book 2; 2200)  
'This the soul sees through grace,'
- (46) Wonder grete love **feeleth** **the soule** with hevenli delite in bihaldynge of this

sothfastnesse, (SP: Book 2; 3561)

‘The soul feels wonderfully great love, with heavenly delight, in beholding  
this truth,’

(47=22) This ymage berist **thou** aboute, (SP: Book 1; 2457)

‘This image is borne by you’

(48=23) This doon **thyn enemies** that thou schuldest thenke here seiyngne sooth,

(SP: Book 2; 1295)

‘Your enemies do this to make you think that their talk is true,’

(49=26) This biddeth **He** bi His prophete that we schulde doo,

(SP: Book 2; 2516)

‘This is what he tells us to do, speaking thus by his prophet’

(50=27) But this love and this mekenesse **wirketh** oonli **the Holi Goost**,

(SP: Book 2; 2743)

‘But this love and this humility is the work of Holy Spirit alone,’

目的語前置が引き起こす VS 語順は The Scale of Perfection において数多く見られる。(40-50)は、have, know, counsel, ask, see, feel, bear, do, bid ,work など多様な他動詞が目的語前置の XVS 語順に起こっていることを示している。もちろん、これには3.2節で見たように XVS 語順に起こる他動詞がこの作品において限定されていないということが下地としてある。XVS 語順に現れる他動詞が限定的である作品においては、目的語前置の XVS 語順は一種の定句表現のような決まったパターンでしか現れない。このような他作品で見られる現象との比較は、後ほど4節で行う。

(40-50)において、(46)の文頭の“Wonder grete love (wonderfully great love)”を除いて、X 位置の目的語は全て前方照応的である。これは後期中英語の作品全般に見られる特徴でもある。目的語の前置は、それが倒置を引き起こすかどうかに関わ

らず、中英語の期間中減少をたどる。目的語前置は中英語期に減少し、また前置される目的語は既知情報を表す頻度が高まっていったとされる。このことを示す一例として、Los (2012: 26) は目的語が前置された古英語の例(51)と、同じ部分が後期中英語で書かれた例(52)を挙げている。なお(51-52)は主語と動詞の語順に関して挙げられている例ではなく、目的語前置にかかる制約の通時的な変化を示す例である。

(51) god weorc heo worhte on me <MT (WSA) 26.10>  
good work she worked in me  
'she performed a good work in me'

(52) Ful guod weork it was and is: þat heo wurchez in me  
(1280-90 SLeg. (L) 66 (Magdalena) 105)

'A full good work it was and is that she works in me'

(Los (2012: 26))

(51)の“god weorc (a good work)”は現代語訳が示すように、既知情報ではない。V2の消失以前は古英語の(51)に見るように、目的語の前置は特に新情報・旧情報に関係なく起こっていた。一方、後期中英語の例である(52)においては前置された“Ful guod weork (A full good work)”は目的語ではなく、be動詞の補語である。

*The Scale of Perfection* の目的語前置が引き起こすXVS語順の例(40-50)は、前置される目的語は既知情報を表す頻度が高まっていったという中英語期の変化を反映している。この作品においてX位置の目的語が多くの場合前方照応であることは、中英語の一般的な特徴に通じる。その一方で、目的語前置のXVS語順が定句的表現に限らずに生じており、また、この語順に起こる動詞に多様性が見られるという点で、*The Scale of Perfection* は後期中英語の作品としては、特徴的に古英語的な性質を残していると言えるだろう。

3節では*The Scale of Perfection* に見られるXVS語順の中で、特に古英語的な古

いタイプの語順として、動詞が他動詞や非能格動詞であるもの、またX位置に目的語が現れるものを扱った。この語順に現れる他動詞も非能格動詞も多様であり、またX位置が目的語である場合の倒置語順にも種類が限定されることなく様々な他動詞が起こっている。次節ではこのような **The Scale of Perfection** の特徴を中英語期の他の作品と比較して考察する。

#### 4. 考察

本節では **The Scale of Perfection** の XVS 語順を、同じ 14 世紀の **Richard Rolle** の作品や **The Cloud of Unknowing** と比較することにより、中英語期に起こった V2 言語から非 V2 言語への変化の中で **The Scale of Perfection** の XVS 語順が通時的にどのような段階にあるとみなせるのかを考察する。

小林 (2019) に示したように、14 世紀前半の **Richard Rolle** において他動詞を含む文の XVS 語順では多くの場合、助動詞と主語の VS 語順が起こっており、他動詞と主語の VS 語順は既に限定的になっている。またこの語順に現れる他動詞は(53)の“**haue (have)**”のように他動性の低いものが殆どであり、(54)のような他動性のある他動詞が起こることは少ない。以下に示す例は **Richard Rolle** の **The Form of Living** (以下 FL) からのものである。現代英語訳は (Allen(1988)) による。

(53) Ful mykel grace haue þai þat es in þis degre of lufe. (FL: 31)

‘Very great is the grace which those who are in this degree of love have.’

(54) In þus many maners touches þe vimage of dremes men when þai slepe.

(FL:16)

‘In these numerous ways does the visual impression of the dream affect men when they are asleep.’

以下の(55-56)にも他動性をもつ他動詞が現れているが、この形式はある事柄に



ついで話を始める際の一種の定型表現として使われており、他動詞の XVS 語順の生産性を示すものではないと考えられる。

(55) For a thyng warne I þe (FL: 28)

‘Now, I’ll give you one warning’

(56) A thyng tel I þe (FL: 33)

‘One thing I will tell you’ (小林(2019: 36))

また非能格動詞と主語の VS 語順は稀にしか起こっていない。

倒置語順を引き起こす X 位置の要素に関しても、Richard Rolle は既に古英語の文法とはかなり異なる様を見せている。X 位置に目的語が前置される XVS 語順は、他動詞の VS 語順の生産性がその下地になるため、他動詞の XVS 語順が限定的にしか現れない Richard Rolle においては、目的語前置の VS 語順は、他動詞と主語の VS ではなく、(57)に見られる様な助動詞と主語の VS が占める割合が大きくなっている (小林(2019))。

(57) and þat may þou noht do bot if þou be wyse. (FL: 40)

‘and you cannot do that unless you are intelligent’

Richard Rolle でも目的語の前置自体は少なくないのだが、それに他動詞と主語の VS 語順が伴う例は限られてきている<sup>3</sup>。

本稿で扱っている *The Scale of Perfection* は 14 世紀後半の作品であるが、上で概説した 14 世紀前半に書かれた Richard Rolle よりも、XVS 語順に関して古英語的な古い語順の特徴を残していることが分かる。*The Scale of Perfection* では、(15-28)が示すように、XVS に現れる他動詞は他動性の高いものを含め広範であり、

<sup>3</sup> (55-56)の位置に起こる目的語は既知情報ではない。情報構造の制約を受けないこのような目的語前置は古英語の古い文法の特徴を残すものと考えられる。XVS 語順に起こる変化には、動詞の種類や X 位置の要素など複数の側面があり、全ての側面で変化の進み方が一様であるわけではない。

また(30-36)に見られるように非能格動詞の XVS 語順も生産性を保っている。目的語前置の XVS においても、(40-50)に見るようにこの作品では多様な他動詞が起こっている。XVS の V に起こる動詞に関しても、また目的語前置の XVS 語順に関しても、古英語的な V2 語順がまだ生産性を保っている *The Scale of Perfection* は、非 V2 への変化に関し、英語の全体的な歩みに比べてより遅い時期まで古いタイプの文法を保っていたと言えるだろう。次に示す 14 世紀後半の作品である *The Cloud of Unknowing* との比較によっても同様の考察が得られる。

*The Scale of Perfection* とおよそ同時代の作品である *The Cloud of Unknowing* においては、XVS 語順に現れる動詞は助動詞が極めて多く、その他に be 動詞、非対格動詞がこの語順に起こる。これは非 V2 言語への変化が進んだ段階の英語において一般的に見られる現象である。また、(58)では他動詞が XVS 語順に起こっているが、“*wenyn (ween, think)*”は目的語として節を取る認識動詞であり、他動性のある他動詞ではない。

- (58) And thus wenyn oftymes som yong foles that God is their enemye, when  
He is their full freende. (CU<sup>4</sup>: 2505-6)  
‘And thus ween oftymes some young fools, that God is their enemy; when He  
is their full friend.’

また、(59)のような伝達動詞が XVS に起こる例が *The Cloud of Unknowing* にも見られるが、3.2 節で述べたように伝達動詞の XVS 語順は現代英語にも残っており、本稿では古英語的な古いタイプの語順とはみなさない。

- (59) Moo sleightes telle I thee not at this tyme (CU: 1238)  
‘More devices tell I thee not at this time’

---

<sup>4</sup> CU: *The Cloud of Unknowing*

他動性のある他動詞が助動詞を伴わずに XVS 語順に現れることが稀である 14 世紀後半の *The Cloud of Unknowing* と比較すると、多様な他動詞や非能格動詞がこの語順に起こり V2 現象が広範に観察される、同時代の *The Scale of Perfection* が、倒置語順に関し特徴的に古英語の古い文法を残していることが明確になる。

目的語前置の XVS に関しては、*The Cloud of Unknowing* では [目的語+助動詞+主語] の語順は珍しくないものの、そもそも他動詞と主語の倒置が少ないこの作品において、当然ながら [目的語+他動詞+主語] の語順は殆ど起こらない。一方、*The Scale of Perfection* においては目的語前置の XVS に多様な他動詞が起こっており、この語順の生産力はまだ高い。このような目的語前置の XVS 語順の生産力の高さと、他動詞、非能格動詞が現れる XVS 語順の生産力の高さは、*The Scale of Perfection* が、中英語期に起こった非 V2 言語への変化の中で、古英語的な V2 言語の特徴を英語全体の一般的な流れよりも遅くまで留めていたことを示している。

## 5. まとめ

基本的に V2 言語であった英語は長い時間をかけて非 V2 言語へと変化した。その変化は直線的なものではなく、方言、著者、また同じ著者でも作品によって、異なる変化の段階が観察されることがある。またあまり大きな時代の隔たりが無い場合、必ずしも後の時代の方が変化が進んでいるわけではない。本稿では 14 世紀後半の作品である *The Scale of Perfection* を資料とし、この作品の XVS 語順がどのような様相を見せているのかを観察した。

古英語的な V2 がどの程度保たれているのかを判断するために、現代英語に至るまでにほぼ消失した、他動詞と非能格動詞の XVS 語順と目的語前置による XVS 語順に焦点をあてた。*The Scale of Perfection* においては広範な他動詞と非能格動詞が XVS 語順に起こり、また目的語が X 位置に起こる VS 語順に多様な他動詞が生じている。このような XVS 語順に関する生産力の高さを同じ 14 世紀の

他の作品と比較することにより、*The Scale of Perfection* は英語の全体的な歩みに比べてより遅い時期まで古英語的な V2 を保っていた点で特徴的であるということを示した。

## 資料

Gallacher, Patrick J., ed., *The Cloud of Unknowing*. Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1997. TEAMS Middle English Texts.

《<http://www.lib.rochester.edu/camelot/teams/cloufrm.htm>》

Horstmann, Carl, ed., *Yorkshire Writers: Richard Rolle of Hampole, an English Father of the Church, and his Followers*. 2 vols. London: Swann Sonnenschein, 1895-6. Corpus of Middle English Prose and Verse. University of Michigan Libraries.

《<http://name.umdl.umich.edu/rollewks>》

Bestul, Thomas H., ed., *The Scale of Perfection*. University of Rochester: The Robbins Library Digital Projects, TEAMS Middle English Texts, 2000.

《<https://d.lib.rochester.edu/teams/text/bestul-hilton-scale-of-perfection-introduction>》

## 参考文献

Allen, Rosamund (1988) ed. and trans., *Richard Rolle: The English Writings, Classics of Western Spirituality*, Paulist Press, New York.

Bækken, Bjørg (2005) “Some Aspects of Word Order in Seventeenth-century English,” *English Studies* 86(6), 511-535.

Bowers, John (2002) “Transitivity,” *Linguistic Inquiry* 33, 183-224.

Bresnan, Joan W. (1994) “Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar,” *Language* 70 (1): 72-131.

Clark, John P. H., and Rosemary Dorward (1991) *Walter Hilton: The Scale of Perfection*. New York, Paulist Press.

- Eitler, Tamás and Marit Westergaard (2014) “Word Order Variation in Late Middle English: the Effect of Information Structure and Audience Design,” in Kristin Bech and Kristine Gunn Eide eds., *Information Structure and Syntactic Change in Germanic and Romance Languages*, John Benjamins, Amsterdam, 203-232.
- Green, Georgia M. (1980) “Some Wherefores of English Inversions,” *Language* 56: 582-601.
- Haerberli, Eric (2002) “Inflectional Morphology and the Loss of Verb-second in English,” in David Lightfoot ed., *Syntactic Effects of Morphological Change*, Oxford University Press, Oxford, 88-106,
- Haerberli, Eric (2007) “The Development of Subject-verb Inversion in Middle English and the Role of Language Contact,” *Generative Grammar in Geneva* 5, 15-33.
- 野中涼 (1992) 「完徳の階梯」上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世末期の神秘思想 中世思想原典集成 17』, 平凡社, 東京, 185-262.
- Kemenade, Ans van and Marit Westergaard (2012) “Syntax and Information Structure: Verb-Second Variation in Middle English,” in Anneli Meurman-Solin, María José López-Couso and Bettelou Los, eds., *Information Structure and Syntactic Change in the History of English*, Oxford University Press, Oxford, 87-118.
- 小林美樹 (2019) 「中英語期の VS 語順 : 13 世紀と 14 世紀の 3 作品を比較して」『神田外語大学紀要』第 31 号、25-44、神田外語大学。
- Kreyer, Rolf (2006) *Inversion in Modern Written English: Syntactic Complexity, Information Status and the Creative Writer; Language in Performance* 32, Gunter Narr, Tübingen.
- Los, Bettelou (2012) “The Loss of Verb-second and the Switch from Bounded to Unbounded Systems,” in Anneli Meurman-Solin, María Jose Lopez-Couso and Bettelou Los, eds., *Information Structure and Syntactic Change in the History of English*, Oxford University Press, Oxford, 21-46.